Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児期における運動遊びと心理的発達の関係
～幼児の発達尺度による検討～

鈴木 康弘
（一関工業高等専門学校）

1. 研究の目的

我が国の急速な近代化の波を受け、幼児の生活も「就寝時刻が遅くなり、生活がおとな化する傾向の認められること」が報告されている。加えて、近年の情報化、少子社会は幼児期の遊び環境を直接体験から間接体験主体へと移行させ、結果として、幼児期に本来発達させなければならない前頭連合野の諸機能への刺激が減少していることが危惧されている。

このような状況の中、幼児期の豊かな体験を通して、好奇心を育み、道徳心の芽生えを培うなど、いわゆる「生きる力」の基礎を育成するための幼児教育の重要性が再認識されている。「生きる力」を育むための一つの環境として、戸外遊びや自然とのふれあいを推進していくことの必要性が話題にのぼることも多くなった。しかしながら、身体活動といわゆる生きる力（内面的な発達）の関係について検討された研究は少ない。

本研究では、幼児の発達の様相を客観的に測定するための尺度を開発すること、さらに、幼児のダイナミックな身体活動が、この時期の内面的な発達とどのように関係しているのかを検討することを目的とした。

2. 方　法

2. 1. 幼児の発達尺度の構成

幼稚園教育要領の教育内容、保育者評定用レジリエンス尺度（高辻, 2002）、増補版乳幼児精神発達診断法（津守ら, 1995）を参考にし、幼児の心理的な発達を測るための質問紙（４６項目）を作成した。

東京都内の幼稚園２園、福岡県の幼稚園１園、岩手県の幼稚園１園の計５園に調査を依頼した。調査は年長児のみを対象とし、担任教諭に回答を求めた。

有効回答数は２４３（回収率１００%、有効回答率９６%）であった。

回答された　項目の質問項目を用いて因子分析（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転）を行い、尺度の構成を試みた。

調査期間

2003年2月～3月

2. 2. 幼児期における運動遊びと心理発達の関係の検討

構成した発達尺度を従属変数とし、幼児の園での遊びの傾向（室内と戸外どちらで遊んでいることが多いか。身体を活発に動かす遊びをよくするほうか。等）を独立変数とした分散分析を行った。

分析には統計処理ソフトSPSS11.5Jを用いて行った。

3. 結果と考察

3. 1. 幼児の発達尺度の構成について

４６項目の質問項目を用いて因子分析を行い、その各項目のうち、因子負荷量が.40に満たなかった８項目、複数の因子にわたって因子負荷が.40以上を示した8項目を削除した。スクリープロットの値を参考にし、因子の解釈可能性を考慮に入れ、再度、因子分析を行った（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転、６因子指定）。その因子負荷量を表１に、因子間相関を表２に示した。各因子の項目を概観し、第１因子は「自己コントロール能力」、第２因子は「創造的能力」、第３因子は「言語・表現能力」、第４因子は「身体的活動能力」、第５因子は「知的好奇心」、第６因子は「共感・協調能力」に関する因子とした。

3. 2. 運動遊びと心理発達の関係について

発達尺度を従属変数、園での遊びの傾向を独立変数とした分散分析を行った。

その結果、男児においては自由遊びの時に、戸外遊びをよくする子どもの方が、室内遊びをよくする子どもにくらべて、「言語・表現能力」、「身体的活動能力」「共感・協調能力」の得点が有意（.05）に高くなる傾向が認められた。同様の傾向が女児においても認められた。

園での身体活動の程度を独立変数として分析した結果は、男児においては身体活動を「とてもよくする」子どもが、「あまりしない子ども」に比べて、「言語・表現能力」、「身体的活動能力」、「共感・協調能力」の得点が有意（.05）に高くなる傾向が認められた。女児では「創造的能力」、「言語・表現能力」、「身体的活動能力」、「知的能力」、「共感・協調能力」の得点が有意（.05）に高くなる傾向が認められた。

園での友達と遊ぶ傾向を独立変数として分析した結果は、男児においては。「ひとりで遊ぶことが多い」子どもに比べて、「３～４人で遊ぶことが多い」子どもの方が、「自己コントロール能力」「言語・表現能力」、「身体的活動能力」、「共感・協調能力」の得点が有意（.05）に高くなる傾向が認められた。同様の傾向が女児においても認められた。

上記の結果を総合して考えると、幼児期の身体活動は、身体に関する物理的・生理的機能の向上をもたらすだけではなく、内面的な発達と密接に関連している傾向のあることが明らかになったということができる。幼児期が神経系の発達の敏感期に相当することを考慮すれば、幼児期の身体活動は身体の生理的機能の向上を目的として取り入れられるよりは、内面的な発達に及ぼす影響を重視して取り扱われるべきであろう。幼児は身体活動を通して、経験の揺れ（葛藤、協調、喜び、悲しみ等）の幅を広げ、それらの刺激を内面化し心を育んでいるものと考えられる。前述したように、現代社会が機械化・情報化・少子化に向けて突き進み、幼児の経験が間接体験へと移行しているこの時代において、幼児の心の発達を促す環境をいかに保障するかは我が国の重要な課題である。今後も、幼児の内面的な発達を促進する運動遊びについて検討を進めていきたい。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

表１　幼児の発達尺度の因子分析結果

項目名	因子パタン					
	因子１	因子２	因子３	因子４	因子５	因子６
危険な場所、危険な遊び方、安全に気を付けて行動することができる	.869	.084	.109	-.021	-.086	-.095
共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使うことができる	.860	.076	-.193	.043	.006	.054
生活する中でのきまりの大切さに気付き、守ろうとすることができる	.854	-.085	.010	-.116	.024	.155
人の話を注意して聞くことができる	.850	.072	-.003	-.018	.010	-.140
良いことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動することができる	.768	.003	-.094	-.186	.075	.251
ひとつの活動や遊びに集中して、最後までやりとげる	.679	.052	.189	.091	.085	-.160
うがいや手を洗うなど、病気の予防に必要な活動を進んで行うことができる	.594	-.116	.104	.061	.116	.086
自分でできることは自分でするようにつとめている	.502	-.076	.208	.189	.095	-.086
いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ様子が見られる	-.043	.918	-.024	-.069	.083	-.002
身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする行動が見られる	.243	.831	-.257	.074	-.173	-.068
身近なものや遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ様子が見られる	-.017	.817	.066	.040	.163	-.126
おもちゃを工夫して使ったり、遊びのルールを自分で作り出すなど、物事の見方が創造的である	-.220	.811	.035	.012	.146	.059
自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶことができる	.133	.790	-.173	.050	.072	-.008
生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ様子が見られる	-.052	.716	-.003	-.096	.200	.168
自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする様子が見られる	-.052	.585	.187	-.071	.122	.085
感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむことができる	.013	.581	.434	.041	-.321	.078
したこと、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを自分なりに言葉で表現することができる	-.035	.200	.950	-.044	-.135	-.078
したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、わからないことをたずねたりすることができる	-.069	-.011	.842	.035	.079	.024
自分の思ったことを相手に伝えることができる	-.029	-.063	.781	.055	.004	.113
相手にわかりやすく話すことができる	.344	-.092	.702	.029	.006	-.068
友達にたたかれるなど乱暴なことをされたとき、その出来事やいきさつについて正直に語ることができる	.202	-.179	.672	-.140	.151	.084
いろいろな遊びの中で十分に体を動かすことができる	-.042	.067	-.002	.937	-.049	-.025
進んで戸外で遊ぶ様子がみられる	-.093	.030	-.090	.872	.036	.114
鉄棒や跳び箱など、あぶないと思われる活動にも失敗を恐れずに取り組む	.078	-.180	.126	.695	.115	.068
日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を示す様子が見られる	.102	.220	.087	.074	.694	-.111
日常生活の中で数量や図形などに関心を示す様子が見られる	.086	.258	-.051	-.010	.693	.067
先生や友達とふれあい、安定感を持って行動することができる	.074	.019	.012	.008	.023	.742
友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合うことができる	.019	.043	.183	.105	.019	.636
先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう様子が見られる	.198	.079	-.049	.187	-.057	.578
友達と一緒に物事をやり遂げようとする気持ちを持つことができる	.395	.128	.040	-.010	-.017	.483
因子寄与	10.032	8.516	9.763	5.797	4.741	9.270

表２　因子間相関

因子	1	2	3	4	5	6
1	1.000	.389	.598	.356	.412	.645
2	.389	1.000	.440	.315	.338	.566
3	.598	.440	1.000	.567	.462	.624
4	.356	.315	.567	1.000	.177	.473
5	.412	.338	.462	.177	1.000	.330
6	.645	.566	.624	.473	.330	1.000

付記

日頃の保育でお忙しい中、調査にご協力いただきました幼稚園の先生方、本研究を進めるにあたり、ご指導、ご援助を賜りました東京学芸大学名誉教授の近藤充夫先生に心より御礼申し上げます。

本研究は、平成１４～１５年度文部科学省科学研究費「幼児の運動遊びと心理的発達の関係の構造化（若手研究Ｂ）・課題番号 14780038」の助成を受け行われた研究の一部であることを申し添えます。

NII-Electronic Library Service